

北伊勢地域の戦国史研究に関する一試論 (1)

——近世に著された軍記・地誌の活用と展望——

水 谷 憲 二

〔抄 録〕

地方の戦国史研究では、比較的古い時期に編纂された地方自治体史の多くが、近世に著された軍記・地誌の信憑性について懐疑なく、無差別に引用されている。しかし、地方自治体史のように、狭域的な歴史を編纂しなければならない場合、一次史料によって確認できない事象に直面すれば、同軍記・地誌の影響を完全に払拭できないジレンマがある。本稿は、一次史料が不足する地域の戦国史研究に活路を見いだすため、三重県の桑名市域に着目し、同軍記・地誌の豊富な情報量の活用を試みた。第1章では、比較的高い信憑性が評価されている太田牛一著の『信長公記』より、伊勢長島一向一揆の記事を再検証し、その有効性を実証した。第2章では、前章の結果をもとに、同書が記す天正元年の織田信長出陣において、一向一揆に加担して信長に抵抗したと言われる小領主層に着目し、それらに関する情報を、同軍記・地誌で確認した(第3章は次年度に続く)。

キーワード 伊勢長島一向一揆、北勢四十八家、信長公記、軍記、地誌

序章一軍記・地誌を用いた北伊勢地域の戦国史研究の現状

戦国期の北伊勢地域(図1／伊勢国桑名・員弁・朝明・三重・鈴鹿・河曲郡)には、当地に伝わる軍記・地誌(本稿では案内記も含めて近世に著されたものを示す)によると、いわゆる「四十八家」(または「四十八士」など)と呼ばれる小領主層が割拠していたと言われている。

これらに関する研究は、比較的一次史料が残る員弁郡・朝明郡をとりあげた飯田良一の成果がある⁽¹⁾。しかし、これらの小領主層が村ごとに点在していたと言われる桑名市域では、一次史料で確認できるのは僅か数家であり、その存在自体が

図1 北伊勢地域位置図



確証に至っていないのが現状である。そこで、一次史料の少なさから行き詰まる桑名市域の戦国史研究に活路を見いだすものとして注目したいのが、現在も大量に残る軍記・地誌の豊富な情報量である。

飯田は、軍記・地誌について「このような軍記物・地誌・村明細帳などに記述されたのは、その時代のその地域の人々の歴史認識である。ただこれらの編さん物は、歴史も伝承も区別せずに載せており、厳密な史料操作のうえに成り立つ近代の歴史学とは、方法も目的も基本的に異なるものである。江戸時代の人々の歴史意識や知識を知るうえでは貴重であっても、今日これをそのまま利用することはできないことはいうまでもない」と述べている⁽²⁾。大方、この意見に賛成ではあるが、あえて私見を加えるならば、軍記・地誌をいわゆる軍記・地誌として十把一絡げにするのではなく、成立年代や性質を熟慮したうえで、個々の価値を見極めるべきである。

例えば、『勢桑見聞略志』（以下『略志』と略す／軍記・地誌の概要は表５を参照のこと）は、確認できる限りにおいて桑名とその周辺に限定された地誌の中では最古であり、著者山本七太夫からさかのぼって４代が桑名藩に仕え、晩年に桑名の史跡・旧事を見聞したまま記したものであり、その独創性が特徴といえる。

また、『桑名志』は近世後期の成立であるが、同じく桑名とその周辺に限定されたもので、古事記を始め100種以上の書物を引用した最も緻密な地誌といえる。さらに、一次史料に該当する文献も多数使用している。そのため、頭からすべての信憑性を否定することはできず、考察に至っても粗雑なものばかりではない。

軍記に至っても、成立時期が戦国期に近ければ、その史料的価値は高くなり、太田牛一著の『信長公記』（以下適宜に『公記』と略す）のように、著者が同時代を体験し、ある程度忠実に記されているれば、いわゆる軍記とは一線を画されることもある。

さらに、三重県内には、近世中期以降に著された地誌が多く現存する。これらについては、成立時期と同時期の記事に限れば、一次史料と同等の価値が保証できるものは数多い。すなわち、地誌の最も危うい点は、成立時期を遙かにさかのぼる古代・中世の記事であり、検証なしに一次史料と同等の価値を保証することはできない。

戦国史研究における成果の需要は、プロフェッショナルに限らず、アマチュアにおいても非常に高い。しかし、現在ある『桑名市史』など、比較的古い時期に編纂された地方自治体史の多くは、軍記・地誌の信憑性が疑われることなく、無差別に引用されている。そのため、「事実」と「虚構」の区別もされないまま、不確かな情報も「事実」のように散乱している状況は否めない。かといって、地方自治体史のように、狭域的な歴史を編纂しなければならない場合、一次史料によって確認できない場面に直面すれば、どうしても軍記・地誌の影響を完全に払拭できないジレンマが存在する。そのため、少しでも信用に足る記事を見出す作業が必要となるわけである。

本稿では、一次史料が不足する地域の戦国史研究に活路を見いだすため、北伊勢地域の中でも桑名市域に着目し、近世に著された軍記・地誌の豊富な情報量の活用を試みる。その作業で最も重要なのは、軍記・地誌の記述の信憑性である。

第1章では、軍記の中でも、比較的信憑性が高いものとして評価されている『公記』より、伊勢長島一向一揆の記事の信憑性を再検証する。第2章では、『公記』における長島一向一揆の記事が信用に足るという前章の結果をもとに、同書6巻の天正元年(1573)の長島出陣において一向一揆に加担して信長に抵抗したと言われる小領主層に着目し、それらに関する情報を、軍記・地誌において確認する。

なお、本稿は、拙稿「太田牛一著『信長公記』における長島一向一揆記事の再考察」(『伊勢の中世』会報120号、伊勢中世史研究会、2005年10月)、同「近世著の軍記・地誌における戦国記事の活用と展望—北伊勢地域の小領主層を素材として—」(『同』会報129号、2006年10月)、同「近世著の軍記・地誌が記す戦国期・北伊勢地域の小領主層と城館(1)—伊勢国桑名郡のデータ整理を目的として—」(『同』会報137号、2007年4月)をもとに、新たに加筆して再構成したものである。

第1章 太田牛一著『信長公記』の再考察

—伊勢長島一向一揆記事の信憑性—

周知の通り、長島一向一揆は、戦国期に尾張国長島(図2/現三重県桑名市長島町)を拠点とした木曾三川下流域で武力蜂起し

た一向一揆であり、着々と天下統一事業を押し進める織田信長に対し、執拗かつ頑強に抵抗する。それに対して信長は、元亀2年(1571)から天正2年(1574)の4年間で3度の出兵をおこない⁽³⁾、悲劇的強硬な手段によって壊滅に追い込んだ⁽⁴⁾。

長島一向一揆については、比較的多くの史料が残されている。しかし、研究するにあたっては一次史料のみでは十分な量とは言えない。そんな中で、長島一向一揆に関する豊富な情報量を有しているのが、太田牛一著の『信長公記⁽⁵⁾』である。

『公記』は、現在の戦国史研究に

図2 桑名市域図



- | | | |
|-----------|--------------|---------------|
| ①長島城(近世) | ⑥中江城(推定) | ⑪桑名市大字上深谷部 |
| ②桑名城(近世) | ⑦桑名市多度町大字香取 | ⑫桑名市大字下深谷部字北廻 |
| ③大鳥居城(推定) | ⑧桑名市長島町大字松之木 | ⑬桑名市大字東方字西場様 |
| ④篠橋城(推定) | ⑨三重郡朝日町大字縄生 | ⑭桑名市大字坂井 |
| ⑤柳ヶ島城(推定) | ⑩桑名市大字西別所 | |

においても、信長の経歴がある程度正確に記された史料として認識され、幅広く利用されている⁽⁶⁾。このような傾向の中で、谷口克広は、同史料が「記された内容よりかなり後になってまとめられた『編纂物』」という問題点を指摘し、同史料の日付の検証をもとに、巻別・事件別の信憑性を提示した論考がある⁽⁷⁾。

谷口の研究によれば、まず巻別の信憑性として、元亀2年の長島出陣が収録されている4巻は誤りが少なく、天正元年の出陣が収録されている6巻は誤りが多く、天正2年の出陣が収録されている7巻も全幅の信頼を寄せるにはほど遠い、と結論づけている。ところが、事件別の信憑性では、日付の正確な事件と日付の不正確な事件が分類されているが、長島一向一揆の記事はそのどちらにも入っておらず、すべての項目において、その正否が導き出されているわけではない。他にも、比較検討の基本となった史料については「日記・文書を中心とした良質の史料によって検討を試みた」とするだけで、その詳細を明らかにしていないなどの問題点がある。

このように『公記』は、筆者の太田牛一が、かなり後になって当時の記録などをもとに編纂した伝記であることや、筆者自身の生涯を記したものでもない。このことから、本章では、書簡や日記などの一次史料とは一線を画すこととする。

したがって、近年著しい地方自治体史の編纂により、長島一向一揆に関連する一次史料の収集も容易になったこともあり、再び『公記』の信憑性を振り返ってみたい。本稿では、まず検討の範囲を長島一向一揆の記事のみに絞りこみ、個別的に検討することにより、少しでも詳細な正否を導くことを目標とする。また、正否を提示するにあたっては、日付と内容の両面からの検討を行う。

なお、長島一向一揆関連年表のうち、表1は『愛知県史』収録の長島一向一揆関係文書⁽⁸⁾、表2は『公記』の4巻（元亀2年の出陣）・6巻（天正元年の出陣）・7巻（天正2年の出陣）収録の長島一向一揆記事をもとに作成した。

表1 伊勢長島一揆関連事項(一次史料年表)

和暦	西暦	月日	事項	出典
元亀元年	1570	9.7	(同日付)本願寺坊官下間与四郎・伊勢国の門徒侍楠七郎左衛門、同国西願御坊へ、織田信長との戦いの際、長島の門徒の加勢を求める。	下間与四郎・楠七郎左衛門連署状(持光寺文書)
元亀2年	1571	5.12	(同日付)足利義昭、近江安養寺へ、伊勢国出陣衆に見舞いの使者を送ったことを伝える。	足利義昭御内書(安養寺文書)
		5.13	信長、徳川家康へ、一向一揆は詔言を申したので、赦免したことを伝え、加勢の申し入れに謝意を述べる。	織田信長書状写(松涛棹筆)
		5.16	(同日付)信長、大館上総介へ、一向一揆は詔言を申したので、赦免したことを伝え、加勢の申し入れに謝意を述べる。	織田信長書状(牧田茂兵衛氏所蔵文書)
		—	長島一向一揆数百人が討死する。	東寺光明護過去帳
		6.13	(同日付)信長、猪子高就へ、一向一揆の探索と殺害を命じる。	織田信長朱印状(猪子文書)
		6.18	(同日付)信長、猪子高就へ、一向一揆成敗の成果に対し、感謝を述べる。	織田信長朱印状(猪子文書)
		6.20	(同日付)信長、猪子高就へ、一向一揆成敗の成果に対し、感謝を述べる。	織田信長黒印状(猪子文書)
元亀3年	1572	1.4	(同日付)本願寺坊官正秀、近江国湖北十ヶ寺へ、本願寺への忠節を求め、長島願証寺とも連絡していることを伝える。	下間正秀書状(誓願寺文書)
		6.4	(同日付)浅井長政、今井小法師へ、長島一向一揆の尾張・美濃両国境付近で放火を伝える。	浅井長政書状(中村不能斎採集文書)

		9.5	(同日付)浅井長政、島秀安らへ、柴田勝家の陣所を攻撃したこと、及び長島への通路の対応について相談することなどを伝える。	浅井長政書状写(百々保氏所蔵文書)
天正元年	1573	7.8	(同日付)本願寺顕如、長島の某へ、阿弥陀如来画像を与える。	阿弥陀如来画像裏書(名古屋市個人蔵)
		9.14	(同日付)美濃国斉藤氏の旧臣日禰野盛就、伊勢神宮御師福島新四郎へ、長島出陣の兄弘就に代わり、祈念の礼を述べる。	日禰野盛就書状写(古文書集)
		9.20	(同日付)北畠具豊(織田信雄)、伊勢国大湊惣中へ、桑名まで船を用意するよう命じる。	北畠具豊書状(大湊町振興会所蔵文書)
			(同日付)信長家臣埴直政、大湊惣中へ、長島から日禰野弘就の足弱衆を送った船主を逃がさないよう命じる。	埴直政書状(大湊町振興会所蔵文書)
		10.一	北畠家臣鳥尾屋満栄、大湊の乗春へ、船道具を集め、同国細波までの出船を促す。	鳥尾屋満栄書状(太田家古文書)
		10.12	(同日付)信長、小早川隆景へ、近日中に長島一向一揆を制圧する意思を伝える。	織田信長書状(小早川家文書)
		10.13	(同日付)北畠具房、桑名から帰港した大湊衆をとがめ、再出船を促す。	北畠具房奉行人奉書(太田家古文書)
				鳥尾屋満栄書状(大湊町振興会所蔵文書)
		10.14	(同日付)北畠具教・具房、大湊中へ、桑名への再出船を催促する。	北畠具教・具房奉行人連署奉書(太田家古文書)
			(同日付)大湊老衆、湯浅賀兵衛へ、大湊の船が桑名から帰港したこととりなしを願う。	大湊老分書状案(太田家古文書)
		10.16	(同日付)北畠具教・具房、大湊老分中へ、方穂久長・鳥尾屋定恒を通じて桑名への出船が遅延しないように命じる。	北畠具教・具房奉行人連署奉書(大湊町振興会所蔵文書)
				鳥尾屋定恒・方穂久長連署状(大湊町振興会所蔵文書)
			(同日付)某、北畠具房が桑名に向かう大湊衆を帰港させるよう命じたことを伝える。	某書状(太田家古文書)
		10.19	(同日付)鳥尾屋満栄、大湊会合衆へ、出船遅延をとがめ、明日の出船を促す。	鳥尾屋満栄書状(太田家文書)
			(同日付)鳥尾屋満栄、大湊会合衆へ、船材木を取り寄せ、明日帰港するよう命じる。	鳥尾屋満栄書状(大湊町振興会所蔵文書)
		10.20	(同日付)北畠家の使者、大湊会合衆へ、同国桑名への早期出船を命じる。	北畠家使者中書状案(太田家古文書)
		10.24	(同日付)北畠家の使者、大湊会合衆へ、同国桑名への明日の出船を促す	北畠家使者中書状案(太田家古文書)
		10.30	(同日付)鳥尾屋満栄、大湊衆へ、同国桑名へ送った船を九鬼嘉隆らに預けたことを伝える。	鳥尾屋満栄書状(太田家文書)
天正2年	1574	7.5	(同日付)甲斐国の武田信豊、種村兵部丞へ、伊勢国長期在陣を賞する。	武田信豊書状(福正寺文書)
		7.21	(同日付)前田利家、賀藤順盛へ、長島から来た女子を引き取ることを伝える。	前田利家書状(加藤景美氏所蔵文書)
		7.23	(同日付)信長、河尻秀隆へ、長島一向一揆根絶の意思を伝える。	織田信長朱印状写(玉証鑑)
			(同日付)信長、荒木村重へ、まもなく長島一向一揆を制圧することを伝える。	織田信長黒印状(徳富猪一郎氏所蔵文書)
		7.24	(同日付)信長、筒井順慶へ、まもなく長島一向一揆を制圧することを伝える。	織田信長黒印状写(古文書集)
		7.28	(同日付)信長、近江国多賀社神宮寺不動院へ、長島一向一揆陣中見舞いの礼を述べる。	織田信長黒印状(多賀神社文書)
		7.29	(同日付)信長、明智光秀へ、長島一向一揆が籠る伊勢国篠橋・大鳥居両城の包囲と落城の見込みを伝える。	織田信長黒印状(永青文庫所蔵文書)
		8.3	(同日付)信長、長岡(細川)藤孝へ、長島三ヶ城での戦いと落城の見込みを伝える。	織田信長黒印状(永青文庫所蔵文書)
		8.5	(同日付)信長、長岡藤孝へ、長島一向一揆が籠る大鳥居城落城を伝える。	織田信長朱印状(永青文庫所蔵文書)
		8.7	(同日付)信長、河尻秀隆へ、長島一向一揆攻めの様子を伝え、一揆根絶の意思を伝える。	織田信長書状(富田仙助氏所蔵文書)
		8.9	(同日付)信長、本郷信富へ、長島一向一揆陣中見舞いの返礼を述べる。	織田信長黒印状写(本郷文書)
		8.17	(同日付)信長、長岡藤孝へ、長島一向一揆の降伏を認めず根絶する意思を伝える。	織田信長黒印状(永青文庫所蔵文書)
		8.22	(同日付)信長、関盛信へ、樋口直房の捕縛に奔走したことを賞する。	織田信長朱印状(賜廬文庫文書)
		8.25	(同日付)羽柴秀吉、関四郎(盛信の子)へ、樋口直房の一件を信長に報告したところ、朱印状が発給されたことなどを伝える。	羽柴秀吉書状(賜廬文庫文書)
		9.29	(同日付)長岡藤孝、某へ、長島一向一揆平定の知らせがあったことを伝える。	長岡藤孝書状(永青文庫所蔵文書)
		9.30	(同日付)信長、某へ、長島一向一揆開城の様子を伝える。	織田信長黒印状(氷上町所蔵文書)
		10.15	専修寺の僧賢へ、加賀国諸江坊へ、長島一向一揆滅亡を伝える。	賢会書状(勝授寺文書)

『愛知県史』資料編11(愛知県、2003年)、奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』(吉川弘文館、1988年)より作成

表２ 伊勢長島一向一揆関連事項(信長公記年表)

和暦	西暦	月日	事項
元亀元年	1570	11.21	織田信長の弟彦七、長島一向一揆に攻められ、小木江村の居城で自害する。
2 年	1571	5.12	信長、長島一向一揆討伐、尾張国津島まで出陣する。 津島・中筋・大田口の三方より進軍する。
		5.16	信長、撤退する。 撤退中、一揆の襲撃を受け、柴田勝家が負傷し、氏家ト全らが戦死する。
3 年	1572	7.27	浅井長政、朝倉義景へ、長島一向一揆が尾張・美濃両国への通路を遮断した旨を伝える。
天正元年	1573	9.24	信長、北伊勢に向けて出陣、大垣城で宿泊する。
		9.25	信長、大田の城がある小稲葉山に陣を敷く。
		9.26	江州勢、八風峠・おふじ畑を越えて桑名方面進出、西別所の一揆を多数切り捨てる。
		10.6	柴田勝家・瀧川一益、片岡の城を降参させる。 片岡降参後、直ちに深谷部の近藤の城を攻撃し、城を立ち退かせる。
		10.8	信長、桑名東別所に陣を移す。 人質の差し出しを無視した白山の中島将監を攻撃し、降参させる。
		—	明智光秀、京都の静原山に立て籠もっていた山本対馬守を、計略を用いて自害させる。 光秀、山本対馬守の首を、桑名東別所まで届ける。
		—	信長、矢田城を堅固にするよう命じ、瀧川一益を置く。
		10.25	信長、撤退する。 途中、多芸山で一向一揆の襲撃を受け、林新次郎らが戦死する。
		10.26	信長、岐阜到着。
2 年	1574	7.13	島中の男女貴賤、長島・矢長島(柳ヶ島)・中江の3ヶ所へ逃げ込む。 信長父子、伊勢長島へ出陣、津島で野営する。
		—	一江口(織田信忠ほか)・香取口(佐久間信盛ほか)・早尾口(信長)へ進軍する。 信長、五妙に野営する。
		7.15	九鬼右馬允ら、安宅船に乗船する。
		—	織田信雄、垂水・鳥屋尾らを率い、大船で戦列に加わる。
		—	信長父子、伊藤の屋敷近くに陣を置き、各方面の陣取りを命じる。 一向一揆、篠橋・大鳥居・矢長島・中江・長島に籠城する。
		—	織田勢、篠橋・大鳥居・加路戸島口・大島口などを攻略する。 (篠橋—津田大隅守ほか、大鳥居—柴田ほか、加路戸島口—織田上野守ほか、大島口—信雄ほか)
		8.2	大鳥居籠城衆、夜中の風雨に紛れて城を抜け出すが、約男女千人が切られる。
		8.12	篠橋籠城衆、長島を攻撃して忠節を尽くす旨を約束したため、長島へ負い入れられる。
		—	越前木目峠砦に樋口直房を守り置いた処、妻子を連れ甲賀をさして駆け落ちする。 羽柴秀吉が追っ手をかけ、途中で成敗し、夫婦の首を長島の陣屋へ持たせて寄こす。
		9.29	信長、長島城中より船で退去する一向一揆を射殺するが、反撃を受け、親族衆ら多数が戦死する。 一向一揆、多芸山・北伊勢方面へ退散する。 中江・矢長島城の男女2万人を焼き殺す。 信長、岐阜へ帰陣する。

岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』(福武書店、1975年)より作成

第１節 元亀２年の出陣

元亀２年の織田信長の長島出陣は、『公記』によれば、出陣期間は僅か５月12日から16日までの間であったことが記されている。

一次史料では、まず、信長の長島出陣以前の５月２日、同日付で氏家直元より沼波右近に対して参陣を要請する書面がある⁽⁹⁾。ついで、信長が長島に出陣した５月12日、同日付で足利義昭より近江国安養寺に対して差し出された書面では、伊勢国出陣衆に見舞いの使者を送った

旨を同寺に伝えている⁽¹⁰⁾。

また、信長が出陣中の5月13日、同日付で信長より徳川家康に対して差し出された書面では、家康の加勢申し入れに対して信長は、長島一向一揆（以下、適宜に「一向一揆」と略す）が早々に恭順の姿勢を示している旨をもって礼を述べている⁽¹¹⁾。そして、信長が長島を撤兵した5月16日、同日付で信長より大館上総介（京都滞在）に対して差し出された書面は、家康に対して差し出された書面と同じ内容である⁽¹²⁾。

ところが、『公記』によると、撤退中の5月16日これまで山々へ退散していた一向一揆の急襲を受け、柴田勝家が負傷して氏家直元が戦死した旨が記されている。これは、前述した徳川家康宛と大館上総守宛の書面に見える一向一揆の恭順姿勢を表す文言とは大きく食い違っている。

以上の記述により推測できる事実は、次の2通りが考えられる。

第1に、両書面（家康宛と大館宛）の内容は実際の戦果と大きく異なり、実は信長軍は早々に攻略の目処が立たなくなり撤退した可能性。すなわち、両書面は撤退後に作成されたものか、もしくは両書面はすでに撤退を見通したうえでの政治的な壮語であること⁽¹³⁾。

第2に、両書面の内容は紛れもない事実であり、信長は早々に恭順を申し出た一向一揆を赦免し、相応の成果をあげたうえでの余裕の撤退であった可能性。については、6月13日付で信長より猪子高就に対して一向一揆の殺害を下命した書面がある⁽¹⁴⁾。すなわち、5月16日の急襲は一向一揆の背約行為であり、猪子に対する一向一揆殺害命令は、このような叛服行為を行った一向一揆に対する報復と解釈することができる。

したがって、元龜2年の出陣は、一次史料と比較すると内容に不自然な点がないとは言えないが、決定的な誤りが指摘できる箇所も見あたらない。但し、日付に関して言及すれば、『公記』は5月12日を信長の出陣日とし、同16日を撤兵としている。それに対して一次史料によれば、まず義昭が伊勢国出陣衆の見舞いに使者を送った日付は、安養寺に対して、その旨を伝える書面の日付である5月12日を含めた過日であり、それは出陣直前から出陣中と考えるのが妥当であろう。しかし、すでに撤退後であったという可能性も視野に入れなければならない。ついで、5月16日付の大館上総介宛の書面は、陣中より発せられたものとするのが適当であろう。しかし、政治的な壮語とも考えられるため、撤退中か撤退した後という可能性もあろう。しかし、この書面により出陣が5月16日以前であったことは確実に証明できる。

なお、猪子高就宛の書面により、長島からの撤退を6月13日以前と考えることができる。

以上より、元龜2年の記事は、内容・日付とも完全な一致はないが、かといって矛盾する記述も見あたらない。『公記』は、出陣から撤退までの期間を5日間としているが、それを一次史料で証明することはできない。しかし、あらゆる可能性を想定しても、信長の長島出陣は、おおよそ5月頃であったことは間違いなく、さほどの誤差は考えられない。

第２節 天正元年の出陣

天正元年の織田信長の長島出陣は、『公記』によると、揖斐川より西側の小領主層の征伐を想定させる内容となっている。しかし、残る一次史料の多くは、伊勢国大湊（現三重県伊勢市大湊町）の出船に関するものであり、『公記』の内容を裏付けるものは見あたらない。

一方、日付に目を向けてみると、『公記』では、信長の出陣期間を、９月24日から10月26日までの約１ヶ月間とされている。一次史料では、９月20日付で北畠具豊（織田信雄）より大湊に対して差し出された書面は、船を桑名まで用意するよう命じるものである⁽¹⁵⁾。この書面は、出陣前と考えたいが、戦況の如何により急遽船が必要になったとも考えられるので、これだけでは判断が難しい。しかし、同日付で塙直政より大湊惣中に対して差し出された書面では、長島から足弱衆を送った船主を逃がさないように命じている⁽¹⁶⁾。すなわち、一向一揆側の日禰野の足弱衆を、戦闘前に長島から脱出させたことによるものとすれば、９月20日を出陣前と考えることができる。

次に、10月12日付で信長より小早川隆景に対して差し出された書面では、近日中の一向一揆制圧を伝えている⁽¹⁷⁾。よって、当日はすでに出陣中であることが考えられる。次に、10月24日付で北畠家使者より大湊会合衆に対して差し出された書面では、桑名への明日の出船を催促している⁽¹⁸⁾。よって、同日までは出陣中であつたと考えられる。次に、10月30日付で北畠家臣鳥尾屋満栄より大湊衆に対して差し出された書面では、桑名へ送った船を九鬼嘉隆らに預けたことを伝えている⁽¹⁹⁾。よって、同30日には撤退していたと考えてよいだろう。

したがって、天正元年の出陣は、内容の正否を裏付けるものは何もないが、出陣期間を９月20日から10月30日までの間に絞り込むことができるため、こと日付に関しては、かなりの信憑性が証明できよう。

第３節 天正２年の出陣

最後の出陣となる天正２年の織田信長の出陣期間は、『公記』では、７月13日から９月29日の約２ヶ月半とされているが、一次史料では信長が出陣した日は特定できない。

但し、７月23日付で信長より荒木村重に対して差し出された書面では、一向一揆の制圧が間近であるような文面が見られる⁽²⁰⁾。それは、翌24日付で同じく筒井順慶に対して差し出された書面でも確認できる⁽²¹⁾。これにより、７月23日が在陣中であることがわかる。また、当時の村重らの重要性を考えれば、政治的な壮語を疑わなければならない⁽²²⁾。

そして、９月29日付で長岡藤孝（細川藤孝）より某氏に対して差し出された書面は、一向一揆の平定を知らせる内容となっている⁽²³⁾。そのため、平定日は同日を含めた過日と考えられるため、平定日は『公記』と一次史料が完全に一致する。

次に、同年の出陣では内容も一致する点が多い。まず一向一揆側の大鳥居城（現桑名市多度町大字大鳥居）の攻略について、『公記』には、８月２日信長軍は夜中の風雨に紛れて城を抜

け出そうとする「大鳥居」の籠城衆を押さえ男女千人を切り捨てたという記述がある。一方、7月29日付で信長より明智光秀に対して差し出された書面では、一向一揆側の「篠橋」(現桑名市長島町大字小島か)と「大鳥居」の両城がまもなく落城する見込みであることが伝えられている⁽²⁴⁾。次いで、8月5日付で信長より長岡藤孝に対して差し出された書面では、8月3日「大鳥井」(大鳥居)が陥落した旨を伝えている⁽²⁵⁾。

また、8月7日付で信長より河尻秀隆に対して差し出された書面には、敵城の陥落と一揆根絶の意思を伝える文言が含まれている⁽²⁶⁾。それは、『公記』の記事とも類似する。したがって、大鳥居城の存在が証明されるとともに、陥落日や内容も矛盾は見られない。

さらに、光秀宛の書状にある篠橋城についても、『公記』では、8月12日「しのはせ」(篠橋)の籠城衆は、長島を攻撃して忠節を尽くすことを約束したので、一命を助けて長島へ追い入れるという記事がある。一方、8月17日付で信長より細川藤孝に対して差し出された書面には、この時にすでに「篠橋」が落着いたことを伝える文言がある⁽²⁷⁾。これにより、『公記』の記事に矛盾はなく辻褄が合う。

また、『公記』にある樋口直房の一件では、越前国木目峠砦を守備していた直房が砦を放棄して逃亡したので、羽柴秀吉が追っ手をかけて成敗し、夫婦の首を長島の陣所へ届けたことが記されている。一方、8月22日付で信長より伊勢国鈴鹿の関盛宣(関盛信)に対して差し出された書面によると、信長は盛宣に対して直房の捕縛命令を下し、結果として直房は絶命したものの、命令を受けて奔走したことが賞されている⁽²⁸⁾。

この時、樋口直房は、羽柴秀吉の麾下にあった⁽²⁹⁾。8月25日付で秀吉より関四郎(盛宣の子)に対して差し出された書面によると、秀吉は関氏のもとに溝口権右衛門尉を派遣し、直房の一件で奔走した経緯を信長に報告したところ、朱印状が発給された旨を通達している⁽³⁰⁾。『公記』には本件の正確な日付が記されていないものの、その概要はほぼ一致している。

その他、『公記』には、7月13日から島中の男女や貴賤が、「長島」・「矢長島」(現桑名市大字下深谷字城ノ掘か)・「中江」(現桑名市大字福島字中江か)に逃げ込み、3ヶ月に渡る籠城により城中の大半が餓死したとある。それは、前述の7月29日付の明智光秀宛の書面とほぼ一致する⁽³¹⁾。また、『公記』には、「長島」より降伏を申し出た一向一揆が船で立ち退くところを銃撃したり、「中江」と「矢長島」の両城の男女2万人を幾重にも柵を取り付けて四方より焼き殺したり、凄惨な様子が記されている。それらの行動は、前述の河尻秀隆や細川藤孝宛の書状にあるような一向一揆根絶の宣言に通じている。

以上より、天正2年の記事は、元亀2年・天正元年に比べて日付・内容とも一致する点が多い。

但し、その一方で、問題点がないわけでもない。例えば、天正2年の長島出陣衆に含まれている佐久間信盛に注目すると、『公記』では、7月13日前後に柴田勝家・稲葉良通・蜂屋頼隆らとともに、「香取口」(現桑名市多度町大字香取)から「松木渡り」(現桑名市長島町大字松

之木）の攻撃に参加している。その後、長島を離れて9月9日上洛、同16日河内国に出陣、同18日明智光秀や細川藤孝とともに、飯盛（現大阪府大東市と四條畷市の辺り）で三好軍と一揆勢を撃破している⁽³²⁾。すなわち信盛は、平定間近に長島を離れたことになる。

ところが、河尻秀隆のケースでは、『公記』の7月13日前後に「早尾口」（現愛知県愛西市早尾町）から進軍した信長の先陣に秀隆の名がある。その一方、7月23日付と8月7日付で信長より秀隆に対して差し出された書面は、長島の内情を知らせるものである⁽³³⁾。あらゆる可能性を考慮すれば、佐久間信盛と同じく、およそ7月13日から23日の間に、何らかの事情で長島を離れたとも考えられる。しかし、『公記』の誤りの可能性は極めて高いと言えよう⁽³⁴⁾。したがって、天正2年に限らず、長島出陣衆については十分な検証が必要であろう。

以上、本章では、『公記』における長島一向一揆記事の信憑性を検討した。その結果、日付に関しては完全な一致は少なかったにしても、矛盾するような箇所も見あたらなかった。内容についても、長島出陣衆に関する記述などで十分な検討が必要な箇所もあったが、それ以外は日付と同様に矛盾点は見あたらなかった。

したがって、『公記』は、一次史料と同等の価値があるとまでは言えなくとも、長島一向一揆の記事においては、使用に慎重を期すならば、比較的有效な史料となりえる。

第2章 近世に著された軍記・地誌が記す戦国記事の活用と展望

―北伊勢地域の小領主層を素材として―

前章では、『公記』における長島一向一揆記事の有効性を実証した。この結果において、誤記の可能性が指摘できる箇所以外は、一次史料に準じて扱うこととする。

本章では、同書6巻の天正元年の長島出陣において一向一揆に加担して信長に抵抗したと言われる当該地の小領主層に着目し、それらの存在を、近世に著された軍記・地誌で確認していく。

第1節 「四十八家」の記事

近世に著された当該地の軍記・地誌を紐解くと、戦国期の北伊勢地域（桑名・員弁・朝明・三重・鈴鹿・河曲郡の辺り）には、いわゆる「四十八家」（または「四十八士」など）と呼ばれる小領主層が割拠していたと言われている。

この北伊勢地域の「四十八家」という語句は、最も早い段階では、寛永頃（1624～45）の神戸良政著『勢州軍記』にて確認できる。それによると、「北方諸家者、源平以後、北条・足利之代々、給領知之人々也」として、三重郡の千草家・宇野部家（采女家か）・後藤家・赤堀家・楠家、菟芸郡の稻生家、朝明郡の南部家・加用家（萱生家）・梅津家・富田家・浜田家、員弁郡の上木家・白瀬家・高松家、桑名郡の持福家（三重郡の誤りか）・木股家（朝明郡の誤りか）があげられ、「北方諸侍在四十八家云々、各為足利家之侍、一味同心者也」（括弧引用

者)と記されている⁽³⁵⁾。

その他、桑名市立中央図書館蔵の『伊勢軍記』(以下、同所蔵本は適宜に『伊勢(桑)』と略す)には「北勢四十八家諸士ハ一村二村ノ長たる故、其存亡、人不知之、故ニ旧記に不載之」とあり、『略志』には「北伊勢諸侍、四十八家トアリ、今不詳、是ハ桑名ニテ所伝聞ノ倂記ス、追テ可勘之」とあり、『桑名志』には「足利家ノ末迄至リ、一村一郷、又ハ数村ニ割拠ルモノ数十家アリ、此ヲ北勢ノ四十八家ト称ス、然ルニ請書ニ挙ル所、大同小異アリ、且其数モ四十八ニトマラス」とある。

冒頭では、北伊勢地域の「小領主層」としてまとめたが、その存在自体もほとんど実証できないため、実態の解明は非常に困難である。しかしあえて言えば、いわゆる国人・地侍・土豪などに分類されるものと考えられる。そして、「四十八家」にあげられている家は、各文献によって異なり、その数も48に止まらない。

次に、軍記・地誌における「四十八家」の記述方法の特徴は、城館もしくは所領に対して、その城主や領主を示して、若干の解説が付けられたりして羅列されたものが多い(以下、「城館・所領―城主・領主」で表す)。

また、同じ文献であっても、「領主」と「城主」の区別があったり、『勢陽五鈴遺響』(以下、『遺響』と略す)では「砦跡」と「城跡」の区別があったりする。その他にも、「案内雑書」・「御領分郷村案内帳」・「案内帳」などの案内記には「古城跡」と記されているなど、成立時期において古城跡が確認されている点にも注目したい(表3)。

表3 軍記・地誌における小領主層の記述例

種別	史料名	成立年	引用	記述一例
軍記	伊勢軍記(桑図所蔵)	近世初期～中期頃か		―に、一の名主、一の城主
	伊勢軍記(三図所蔵)	同上		一城主、一村城主、一の城主 一の名主、一(地名)
	伊勢北郡諸士録	不明		一村領主、一領主 一村城主、一城主
地誌	勢桑見聞略志	宝暦2年(1752)序文		一城、一(地名)
	三国地志	宝暦5年(1755)序文		一堡
	背書国誌	安永8年(1779)序文		一村
	桑名雑志	寛政8年(1796)序文		一(古城城主)
	桑府名勝志	文政(1818～30)序文	伊勢軍記	一村城主、一城主 一名主、一村
			旧記	一村
			勢陽雑記拾遺下	一城主
	勢陽五鈴遺響	天保4年(1833)刊		一砦跡、一城跡
	桑名志(古跡の部)	天保6年(1835)序文		一城跡、一城
	桑名志(興替の部)	同上	伊勢軍記 (伊勢雑記)	―に
	伊勢名勝志	明治22年(1889)刊		一城跡
	桑名藩御領分郷村案内帳	文政10年(1827)調		一村古城跡

案内記	案内帳	不明		一村古城跡
	案内雑書	不明		一村古城跡

傍線（一）は地名や城館名、その後に人名が続く

この「四十八家」に関する代表的な史料には、『伊勢軍記』があげられる。『伊勢(桑)』の「四十八家之事」によると、著者は、戦国期に「三重郡羽根乃城主」だった栗田監物より6代目の子孫と記されているので、およそ近世初期から中期頃の著作と考えられる。

この栗田監物は、天正13年(1585)頃の「織田信雄分限帳」(以下、「信雄」と略す)でも確認でき、信雄の配下として「員弁郡志知郷内」(300貫)を与えられていたとされ、実在の人物と判断できる⁽³⁶⁾。「志知」は、員弁川の南、現在の桑名市大字志知にあたり、西は員弁郡東員町に接する。また、軍記・地誌では、「縄生」と記されている方が多い。現在の三重郡朝日町大字縄生は、員弁川の南、北は桑名市に接する。

この『伊勢軍記』は、近世に著された地誌の「四十八家」の記事に大きな影響を与える。

第2節 調査方法

まず、調査の基準となる『公記』において「城館・所領一城主・領主(人名)」が確認できるものを対象とする。そして、その該当記事の抜粋は、次である(括弧・傍線引用者)。

- ①「柴田・瀧川兩人者、さか井目城片岡と申者之構取巻被攻候之处、降参申候」
- ②「十月六日退出(片岡)、右兩人(柴田・瀧川)、直に、ふか屋へ之近藤居城取懸、かねほりを入被攻、是も御侘言申罷退候也」
- ③「しろ山之中島将監、御礼ニ不罷出、然間、佐久間・蜂屋・丹羽・羽柴四人被仰付、築山を築、かねほりを入被責、難拘存知、此上ニ而御侘言申退散也」

以上の記事の中から、次の城主・領主をキーワードとして設定する。

- ㊶片岡(カタオカ)
- ㊷近藤(コンドウ)
- ㊸中島将監(ナカジマショウゲン)

次に、当地の主な軍記・地誌において古跡や北勢四十八家(または北勢諸士)に関する記事から、「城館・所領一城主・領主」(もしくはその逆)の組み合わせが明瞭なものを調査の対象とする。但し、原則として、長島一向一揆の叙述は対象外とした。

これらの対象から、㊶～㊸のキーワードに該当する城主と領主をすべて検索して「城館・所領一城主・領主」の組み合わせを抜き出した。例えば、㊶の「片岡」ならば、「片岡」の名が付く城主と領主、もしくは「カタオカ」と読めるものや、明らかに誤字と判断できるものも対象に含めた。その結果は、表4になる⁽³⁷⁾。

表4 軍記・地誌における小領主層の記述例―片岡・近藤・中島将監

史料名	引用	城館名・所領名―城主名・領主名		
		片岡	近藤	中島将監
伊勢軍記(桑図)		深谷部ノ城主―片岡掃部	東方―近藤左京進	―
伊勢軍記(三図)		堺邑城主―片岡掃部頭	深谷部邑北廻ノ城主―近藤右京佐	―
伊勢北部諸士録		上深谷部村領主―片岡掃部 (または境目領主)	下深谷部村領主―近藤右京進 (または右京亮)	白山城主―中島将盛
勢桑見聞略志		下深谷部―片岡掃部	元愛宕山―近藤右近	―
三国地志		片岡堡―片岡掃部	北廻堡―近藤右京	―
背書国誌		―	―	―
桑名雑志		上深谷部古城跡主―片岡掃部	下深谷部古城跡主―近藤右京之助	―
桑府名勝志	伊勢軍記	堺村城主―片岡掃部頭	北廻城主―近藤右京佐	―
	旧記	上深谷部村―片岡掃部	下深谷部村―近藤右京亮家教	―
勢陽五鈴遺響		堺城跡―片岡掃部亮	北羽佐間砦蹟―近藤右京亮	白山城跡―中島将監
桑名志 (興替の部)	伊勢軍記 (伊勢雑記)	堺―片岡掃部頭	北迫―近藤右京佐	―
桑名志 (古跡の部)		堺城墟―片岡掃部頭	北迫城墟―近藤右京佐	白山城址―中島将監
伊勢名勝志		堺城址―片岡掃部頭 (または掃部亮)	東方城址―近藤右京進 下深谷部城址―近藤家高・家教	白山城址―中島将監
郷村案内帳		―	―	―
案内帳		―	下深谷部村古城跡―近藤右京亮	―
案内雑書		上深谷部村古城跡―片岡掃部	下深谷部村古城跡―近藤右京亮	―

『桑府名勝志』と『桑名志』が引用する「伊勢軍記」は、記述の内容が若干異なる箇所も見受けられるため、各々調査の対象に加えた。

表5 軍記・地誌・案内記の概要

種別	史料名	著者	成立	特徴
軍記	伊勢軍記(桑図)	道誓の孫	近世初期～中期頃か	著者は、いわゆる「北勢四十八家」の1つである三重郡羽根城主(または朝明郡繩生城主)栗田監物の子孫といわれる。祖父の道誓から語り継がれた四十八家の存亡を記す。後の軍記・地誌に大きな影響を及ぼす。同じ道誓の孫の著作と考えられる『伊勢軍記』でも、三重県立図書館所蔵本は、長島一向一揆に関する記事が多い。
	伊勢軍記(三図)			
	伊勢北部諸士録	(不明)	(不明)	「北勢四十八家」について、比較的規模の大きいものはその盛衰などを叙述し、小規模なものは領主―所領のみを列記する。また、小瀬甫庵著『信長記』や遠山信春著『織田軍記』によると考えられる信長の伊勢出兵に関する叙述も載せる。
地誌	勢桑見聞略志	山本七太夫	宝暦2年(1752)序文	桑名とその周辺に限定された地誌では最も古い。著者は、曾祖父から4代が桑名藩に仕え、晩年に桑名の史跡・旧事などを見聞したままに記したものであり、その独創性が特徴。それゆえ、戦国期の記事については、他の軍記・地誌と異なる点が多く、誤りも多いことが推測できる。
	三国地志	藤堂元甫	宝暦5年(1755)序文	伊賀・伊勢・志摩国の地誌をまとめる。古蹟の部にある当該地の城館は、すべて「堡」と記されている特徴がある。
	背書国誌	古谷久語	安永8年(1779)序文	伊勢国の地誌。
	桑名雑志	一步庵主人	寛政8年(1796)序文	「桑名御領内古城跡主」には、城館とその城主を列記する。
	桑府名勝志	義道	文政(1818～30)序文	著者は、桑名伝馬町大悲山長円寺の学僧、号は魯縞庵。1巻の最後に「寛政十年(1798)五月十一日草稿出来」とある。桑名の詳細な地誌の中では最初のものといえる。項目をあげ、出典ごとに内容を列記していく形式で記されているのが特徴。その他、魯縞庵の著書には、『魯縞庵隨筆』・『久波奈名所図会』などがある。

	勢陽五鈴遺響	安岡親毅	天保4年(1833)刊	伊勢国13郡の地誌で、80巻11冊の大作。伊勢国全体の地誌では最も豊富な内容。城館跡については、「砦跡」と「城跡」の区別がある。
	桑名志	片山恒斎	天保6年(1835)序文	桑名藩領に限定されたもので、古事記を始め100以上の書物を引用した最も緻密で完成された地誌。戦国期の記事については、他の地誌に比べて著者の考察が堅実といえる。
	伊勢名勝志	宮内黙藏	明治22年(1889)刊	伊勢国の地誌。今回取り上げた『伊勢軍記』・『桑名志』・『勢陽五鈴遺響』などの他、軍記・地誌を多用し、城跡の位置を細かく指定している。
案内記	御領分郷村案内帳	柳本七郎右衛門	文政10年(1827)調	文政10年当時の桑名藩領(桑名郡・員弁郡・朝明郡・三重郡)各村の庄屋・石高・税高・戸数・人口・牛馬数・寺社などの情報に加え、古城跡の有無とその城主名を載せる。桑名・員弁郡の一部を欠く。
	案内帳	(不明)	近世後期頃か	『御領分郷村案内帳附案内帳』では、本書に表題がないため、仮に『案内帳』と名付けている。書式は上記と同じ、完全な状態で残る。
	案内雑書	(不明)	近世後期頃か	書式は上記と同じ、完全な状態で残る。

各文献および『桑名市史』補編(桑名市教育委員会、1960年)より作成。

第3節 結果

①片岡（カタオカ）

城主と領主は、「片岡掃部」・「片岡掃部頭」・「片岡掃部亮」とあり、すべて「頭」・「亮」の有無のみの僅かな誤差である。

また、城館の所在地および所領は、『略志』のみ「下深谷部」とする以外は、「堺」もしくは「上深谷部」の違いだけである。上深谷部は、現在の桑名市大字上深谷部に当たる。しかし、「堺」という地名は現在確認できない。但し、『桑名志』によると、当該地が「堺村」と呼ばれていた頃があったという⁽³⁸⁾。また、『桑名郡志』も上深谷部村の旧名を「堺」あるいは「坂井」と記している⁽³⁹⁾。

他説では、現在の桑名市と四日市市の境目辺り、員弁川の南に「桑名市大字坂井」がある。稲本紀昭は、『公記』の「さか井」を現在の坂井と考えることで、柴田・瀧川の両人は四日市方面から北上し、坂井の「片岡」を降したあと、深谷部の「近藤」を攻撃したと推察している⁽⁴⁰⁾。

『公記』によると、信長は、9月24日岐阜城から北伊勢に向けて出陣し、当日は美濃国大垣の城に宿泊し、同25日「大田之城」がある小稲葉山に陣を敷き、10月8日桑名東別所に陣を移したことになる。その一方、北伊勢攻略の先鋒と推測される江州勢が、八風峠・「おふじ畑」を越えて9月26日に桑名入り、佐久間・羽柴・蜂屋・丹羽ら4人が「西別所」（現桑名市大字西別所）の一揆を攻略している。すなわち、美濃方面より南下して桑名入りした信長本隊と、近江方面より桑名入りした軍勢が確認できる。

ところが、「さか井目城片岡」と「ふか屋へ之近藤居城」を攻撃した柴田・瀧川の両名は、どこから桑名に入ったかは明確にされていない。『公記』では、両名が「さか井」の「片岡」を降したあと、「直に、ふか屋へ之近藤居城」を攻撃したとある。現在の坂井から深谷部までの距離は、直線にしても、員弁川を挟んでおよそ4キロあるので、「直に」近藤の城を攻撃したとすれば、「さか井」は上深谷部の「堺」と考えた方が妥当である。

柴田・瀧川は、美濃方面から進軍した信長の先鋒隊として桑名へ入り、上深谷部の「片岡」を降したあと、南隣に位置する下深谷部の「近藤」を攻撃したと考えられる。もし、仮に「さか井」が坂井だとすれば、八風峠から入り、「西別所」を攻略した江州勢の道筋にあたるため、江州勢が対応する方が妥当である。

このように、一次史料と地誌を対比させながら熟考すれば、また違った結論を導きだすことができる。

⑥近藤 (コンドウ)

城館の所在地および所領には、「北廻」・「北迫」・「北羽佐間」や「下深谷部」と記されたものがある。現在の桑名市には、「大字下深谷部字北廻」という地名が存在する。また、「北廻」・「北迫」・「北羽佐間」は、すべて「キタハザマ」と読むことができる。

また、『公記』では「ふか屋へ之近藤居城」とあり、「ふか屋へ」＝「下深谷部」と繋げることができる点も問題はない。また、城主と領主においても若干の違いはあるとはいえ、大方が「コンドウウキョウノスケ」と読めることで共通し、もしくは類似している。

その他、『略志』には「元愛宕山一近藤右近」とあり、「元愛宕山」は西別所村（現大字西別所）にあたる⁽⁴¹⁾。この西別所の「元愛宕山」城館については、『公記』の天正元年の信長出陣において、「西別所一揆楯籠候を、佐久間右衛門・羽柴筑前・蜂谷兵庫頭・丹羽五郎左衛門、四人として取懸責破」（9月26日）とあるので、長島一向一揆との関連性を否定することはできない。

さらに、『伊勢 (桑)』には「東方一近藤左京進」とあり、「東方」は現在の桑名市大字東方にあたる。また、『伊勢名勝志』では、「下深谷部城址一近藤家高・家教」と「東方城址一近藤右京進」があり、「近藤右京進」の城館跡と言われる「東方城址」は現在の桑名市大字東方字西場様を示しており、『伊勢 (桑)』に近似している。このように、『伊勢名勝志』では「下深谷部城址」と「東方城址」の「近藤」の存在を示している。また、『伊勢 (桑)』と『伊勢名勝志』が記す「東方」と「近藤」は、『公記』の記述との共通点は見られない。

◎中島将監 (ナカジマショウゲン)

「中島将監」は、『伊勢北郡諸士録』（以下、『諸士録』と略す）が「中島将盛」とするが、「将監」の誤りと考えられる誤差である。

また、該当した文献は、4点のみである。その中でも、『遺響』・『桑名志 (古跡の部)』・『伊勢名勝志』は、いずれも信長の軍記の長島一向一揆記事に沿う解説が付けられている。

したがって、中島将監は、本節で取り上げた3者の中でも、当該地における桑名郡内の領主や城主としての認知が最も低いことがわかる。

むすび

本稿では、一次史料が不足する桑名市域の戦国史研究事情において、近世に著された軍記・

地誌を交えての実証的研究を試みた。各章のまとめは、以下である。

第１章では、『公記』の長島一向一揆記事の信憑性を検証するため、日付と内容の両面から、一次史料との比較を試みた。その結果、同記事の信憑性を包括的に結論づけるなら、日付においては、完全な一致は少なかったとしても、矛盾するような箇所も見あたらなかった。内容においても、長島出陣衆に関する記述などで十分な検討が必要な箇所もあったが、それ以外は日付と同じく矛盾点は見あたらなかった。したがって、『公記』が一次史料と同等の価値があるとはまでは言えなくとも、長島一向一揆の記事については、使用に慎重を期すならば、比較的有效な史料になりえる。

第２章では、『公記』の長島一向一揆の記事が信用に足るという第１章の結論をもとに、同書６巻の天正元年の長島出陣において一向一揆に加担して信長に抵抗したと言われている小領主層の「片岡」・「近藤」・「中島将監」に着目した。すなわち、『公記』において「城館・所領」と「城主・領主」が確認できる小領主層は、当該地の軍記・地誌においてどのように記されているのか、「城館・所領一城主・領主」の組み合わせにより、『公記』に対して他の軍記・地誌を比較する方法をもって、その信憑性の検証を試みた。結果として、「中島将監」は信長の軍記が強く影響しており、「片岡」と「近藤」は、信長の軍記と当該地の伝承との交雑により独自性が確認できた。また、『公記』との比較検討を試みた場合、この３者の存在とその城館の大方の位置に関する情報に限れば、決定的な誤謬も確認できなかったため、ある程度の信頼性は期待できる。なお、『略志』は、他の軍記・地誌と異なる点が多かったことも付け加えておきたい。

引き続き、「北伊勢地域の戦国史研究に関する一試論（２）―近世に著された軍記・地誌の活用と展望―」では、第３章で、まず軍記・地誌が記す桑名の小領主層と城館のデータを整理し、そこから一次史料で確認できるものを明確にする作業などを行う。第４章では、存在が確実に証明できる桑名の小領主層の中でも、近世から近代を通じて、その家系が確認できる小串家（次郎左衛門尉詮行）・森家（清十郎）・矢田家（半左衛門）・伊藤家（武左衛門）に着目し、近世以前から土着する小領主層の生き残り事例を提示する。

〔注〕

- （１） 飯田良一「北伊勢の国人領主一十ヶ所人数、北方一揆を中心として」（『年報中世史研究』９、1984年）、同「員弁郡の国人領主について」（『員弁郡東員町山田 山田城跡発掘調査報告』、東員町教育委員会、1984年）。
- （２） 『四日市市史』16（四日市市、1995年）451頁。
- （３） 「紹巴富士見道記」（『群書類従』18、続群書類従完成会、1928年、800頁）では、筆者の里村紹巴は、永禄10年（1567）信長が長島の「一向念仏坊主」を攻撃する様を目撃している。
- （４） 長島一向一揆については、金子昭次「濃尾平野に於ける本願寺教団の発展と一向一揆」上・下

- (『日本歴史』161・162、1961年)、稲本紀昭「織田信長と長島一揆」(朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質』近世・近代、思文閣出版、1995年)などがある。
- (5) 本稿では、岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』(福武書店、1975年)を使用する。また、『信長記』には、太田牛一本と小瀬甫庵本の2種類があり、田中久夫の論考(「太田牛一著『信長公記』成立考」、『帝国学士院紀事』5-2・3、1947年)以降、牛一本を『信長公記』、甫庵本を『信長記』と区別するようになった(石田善人『信長記十五卷解題』、福武書店、1975年、3頁)。本稿は、それにならう。
- (6) 三鬼清一郎は、『信長公記』を含め、記録類に引用されている文書について、作者による何らかの潤色が施されている可能性があり、「傍証史料によって、その価値が確定できる限りにおいて利用すべきで、拡大解釈を行ってはならない」と、使用上の注意点を言及している(「織田政権の権力構造」、『講座日本近世1 幕藩制国家の成立』、有斐閣、1981年、84頁)。
- (7) 谷口克広「太田牛一著『信長記』の信憑性について一日付けの考証を中心として」(『日本歴史』389、1980年)。
- (8) 『愛知県史』資料編11織豊1(愛知県、2003年)393・496~527頁、奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』(吉川弘文館、1988年)を参照する。以下、『愛知県史』資料編11織豊1は、『愛県』と略す。
- (9) 「氏家直元判物写(近聞雑録五七)」(『愛県』)496~97頁。
- (10) 「足利義昭御内書(安養寺文書)」(『愛県』)497頁。
- (11) 「彼一揆原所楯籠之間、可攻死之处、種々依令佗言赦免候」(「織田信長書状写<松涛棹筆>」、『愛県』、393頁)。
- (12) 「織田信長書状(牧田茂兵衛氏所蔵文書)」(『愛県』)498頁。
- (13) 稲本は、この文面を政治的言辞とし、陸地戦を主体とした軍団編成の限界を痛感したことによる撤退と推測している(稲本前掲論文43頁)。
- (14) 「織田信長朱印状(猪子文書)」(『愛県』)499頁。
- (15) 「北畠具豊書状(大湊町振興会所蔵文書)」(『愛県』)503頁。
- (16) 「塙直政書状(大湊町振興会所蔵文書)」(『愛県』)503頁。
- (17) 「不移其時日、勢州一揆等、加成敗平均候」(「織田信長書状<小早川家文書>」(『愛県』、504~505頁)。
- (18) 「北畠家使者中書状案(太田家古文書)」(『愛県』)509~510頁。
- (19) 「鳥屋尾満栄書状(太田家古文書)」(『愛県』)510~511頁。
- (20) 「具九郎左衛門尉可申遣候、長島之事猶以詰陣申付候間、落居不可有程候、開陣候者則可為上洛之条、期面談候」(「織田信長黒印状<徳富猪一郎氏所蔵文書>」、『愛県』)517頁。
- (21) 「織田信長黒印状写(古文書集)」(『愛県』)517頁。
- (22) 7月20日荒木村重と高山右近は、摂津国中島で石山本願寺の一揆勢を攻撃し勝利している(谷口克広『織田信長家臣人名辞典』(吉川弘文館、1995年、30・230頁)。

- (23) 「長岡藤孝書状（永青文庫所蔵文書）」（『愛県』）522～23頁。
- (24) 「織田信長黒印状（永青文庫所蔵文書）」（『愛県』）518頁。
- (25) 「織田信長朱印状（永青文庫所蔵文書）」（『愛県』）519頁。
- (26) 「河うち敵城共落居之体」「男女悉撫切ニ申付候、身をなけて死候者も多候」（「織田信長書状〈富田仙助氏所蔵文書〉」、『愛県』、519頁）。
- (27) 「此表之事、篠橋落居以来弥押詰」（「織田信長黒印状〈永青文庫所蔵文書〉」、『愛県』、520～21頁）。
- (28) 「織田信長朱印状（賜蘆文庫文書）」（『愛県』）521頁。
- (29) 『織田信長家臣人名辞典』（前掲）342頁。
- (30) 「羽柴秀吉書状（賜蘆文庫文書）」（『愛県』）521～522頁。
- (31) 「長島の事も存之外雑人原北入候て、無正体事推量之外候、はや城中ニ男女の餓死ことの外多由相聞候」。
- (32) 「長岡藤孝書状（永青文庫所蔵文書）」（前掲）、『織田信長家臣人名辞典』（前掲）180～181頁。
- (33) 「織田信長朱印状写（玉証鑑）」（『愛県』）516～517頁、「織田信長書状（富田仙助氏所蔵文書）」（『愛県』）519～520頁。
- (34) 谷口によると、当時の河尻秀隆は織田信忠の軍団に所属し、天正2年から翌年まで東美濃で働いているため、『公記』にある秀隆の長島参陣を誤記としている（谷口克広「織田信忠軍団の形成と発展」、『日本歴史』419、1983年、53・55～56頁）。同氏の説に従えば、天正2年の長島出陣には信忠も参陣していること、そして東美濃地方と伊勢長島の距離がさほど離れていないことを考慮すれば、短期間で長島より東美濃へ移動することも可能であるため、ここでは『公記』の記事を完全に否定することは避けたい。
- (35) 「勢州軍記」（『続群書類従』第21輯上、続群書類従完成会、1983年訂正3版）7頁。
- (36) 「織田信雄分限帳」（『新編一宮市史』資料編補遺2、一宮市、1980年）273頁。
- (37) 『桑府名勝志』と『桑名志』が引用する「伊勢軍記」は、記述の内容が若干異なる箇所も見受けられるため、各々調査の対象に加える。
- (38) 「往古ハ神田ノ森云、後堺村ト改メ、又上深谷部ト称ス」。
- (39) 『桑名郡志』中（歴史図書社、1980年）53頁。
- (40) 稲本前掲論文44頁。
- (41) 拙稿「近世地誌類にみる愛宕山城跡」（『愛宕山城跡発掘調査報告書』、桑名市教育委員会、2006年）。

（みずたに けんじ 文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

（指導：青山 忠正 教授）

2011年9月27日受理